The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「臼井吉見(1905～1987)」
Author(s)	滝口, 明祥
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 25-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97239
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

追悼文を読む

「臼井吉見（1905～1987）」

滝口明祥

太宰が玉川上水に入水した一九四八年六月、彼の代表作とされる『人間失格』は掲載誌の「展望」にまだその第一回までしか発表されていなかった。第二回、第三回は加熱する情死報道とそれに伴う太宰ブームの中で発表されたのであり、そのことが『人間失格』という小説の当時の受容を大きく規定していっただろうことは間違いない。そして、その際に大きな役割を果たしたのが「展望」編集長の臼井吉見である。発行元である筑摩書房は、第三回が掲載された「展望」八月号が発売される前の七月に既に単行本『人間失格』の発売に踏み切り、「筑摩書房として最初のベストセラー」（『筑摩書房の三十年』一九七〇・十二、筑摩書房）となったが、その単行本の「あとがき」を執筆したのも臼井であった。

そのため、臼井が太宰について書いた文章のほとんどは『人間失格』を軸として語られることになる。太宰の入水の直後と言っていい時期に書かれた「『人間失格』をめぐって」（「日本読書新聞」一九四八・六・三〇）の中で臼井は、太宰の死の何ヶ月も前から「僕はこの作者のゆくてにただならぬものを感じていた」とすることによって『人間失格』が太宰にとって特別な作品であることを読者に印象づけるのである。そして『人間失格』を「太宰という一個の人間と作家が、その生涯をかけて書きあげた遺書であった」と評し、また「太宰自身によって書かれた最高の太宰治論でもある」と述べている。前述の「あとがき」でも臼井は「この作品は、作者が自身の文学の最高のかたちで書きあげた遺書であり、自画像である」と述べており、臼井の『人間失格』に対するそのような評価は「『人間失格』論」（「光」一九四八・九）でも基本的には変わらない。

第三回が掲載された「展望」（一九四八・八）には、臼井による「太宰治論」（のちに福田恒存編『太宰治研究』一九四八・十一、津人書房に収録）も掲載されていた。そこで臼井は、太宰を私小説でも客観小説でもない作家として規定し、「決して実生活を語ろうとせず、それでゐて実生活の表情がそのまま文学の表情に化したところに、彼の文学の独自性がある」と述べ、太宰の戦前からの歩みを振り返りつつ、太宰は「その文学的出発に当つて、既成秩序のかげにかくされてゐたこんにちの混乱の人間的実体を感受してゐた」のであり、「いはば、戦前において戦後の作家だった」とする。また、「敗戦後のおびただしい仕事のなかで、特に注目すべきものは『ヴィヨンの妻』『斜陽』『人間失格』の三編であ」るとし、前二者が女

性を主人公にしているのに対して「『人間失格』は文字どほり太宰の自画像であつた」と言い、やはり「自画像」として評価している。ただしそれは「自然主義的私小説」とは「まつたく次元のちがつた場所で、生活と文学に一分のスキもないものとして、自身を文学に化さしめた」のだとされる。そして「太宰の本領は短編にある」として、「志賀、葛西、芥川、井伏もその天禀の才能の豊醇多彩において、太宰に何歩かをゆづらざるをえないのではなかろうか」と述べるのである。

もっとも、「展望」（「展望」一九四八・九）は右に挙げたような太宰評とは少々趣を異にする。ここでは臼井は中村光夫の「笑いの喪失」（「文芸」一九四八・七）に触れながら、太宰は「現代作家のうちで、無類のコメディとパロディの名人だつた」のであり、「悲劇的な表情をたたへてゐる『人間失格』にしても、本質的にはコメディと見るべきではないだろうか」とまで述べているのである。しかも次のような否定的なコメントが続くのだ。「しかし、彼の文学がコメディだつたにしても、真の人間の劇を造型するまでには至らなかつたと思ふ。造型への努力はほとんど見られず、造型する前に、彼のコメディは歌であつた。叙情詩であつた」。これは臼井が戦後、「展望」（「展望」一九四六・五）において、「今こそ我々は短歌への去り難い愛着を決然として断ち切る時ではなからうか。これは単に短歌や文学の問題に止るものではない。民族の知性変革の問題である」と述べていたことを考えあわせれば、非常に興味深いと言えるだろう。このことは右に紹介した文章の中での『人間失格』評および太宰評が書籍の宣伝を兼ねたものであり、臼井自身も他の面があることを知りながら太宰の一面のみを拡大して語っていた可能性を示唆するのである。だが一般的に影響があったのは無論、『人間失格』を「遺書」であり「自画像」であるとする評であり、『人間失格』をコメディとする見方のほうはほとんど浸透することはなかったのであった。それは或いは臼井にとっても皮肉なことであったのかもしれない。